

辻邦生のパリ滞在(9)

Le séjour de Kunio Tsuji à Paris

佐々木 涇*

SASAKI Thoru

10 啓示

10-1 回想から

辻邦生がギリシア旅行をし、アテネにあるアクロポリスの丘のバルテノン神殿を見たときの思いを、論者が知ったのは1968年である。そして辻邦生がこの思いを初めて公表したのは、1968年6月号の「文学界」に掲載した『主題からの探索』である。論者はこの時点では、このエッセーを読んではない。読んだのはこのエッセーが『異国から』（晶文社、1968. 8）のあとがきに再掲載されたときであった。ところで論者が初めてパリに滞在し始めたのは1969年3月からで、二年近く滞在后、帰国するおりに、辻邦生の体験を追体験するつもりでバルテノン神殿を訪れた。論者のパリ滞在は辻邦生の二度目のパリ滞在（一年間）の後半と重なっており、そのときにはこの体験については聞かなかった。

さて辻邦生にとって啓示と言ってよいこのできごとをエッセーや対談からその回想した部分を見るが、世に公にした順にそってみることにする。まず上に記した『主題からの探索』である。

私は自分の性癖である形而上学偏愛から、主としてフランス感覚哲学、ヘーゲル、後にハイデッガーなどを中心に、哲学、心理学、民俗学などの領域に自らの解答を求め、時には小説美学の森の奥で行きなやむこ

ともあった。これらの貧しい探索は後に『小説への序章』にまとめられるものとなった。

しかしながらこうした探索は、ながい忍耐と時間を要求したが、その知識のモザイク的積分のなかからは、実際の作品の契機というものは生れてこないようだ。少くとも私の場合、こうした日々の揚句、1958年の夏、ギリシアに旅行することがなかったならば、作品にとりかかるまで、なお多くの時間が必要だったように思える。ギリシアで私はバルテノンの神殿を見た瞬間、一切がひっくりかえったような感覚を味わった。それは、ちょうどそれまで最も信頼を置き確実だと信じてきた客観的現実が、影のように色褪せてしまって、そうした永劫帰還する滅びの上に、なにか永遠の思念の結晶のようにギリシア神殿がたちはだかっているのであった。こうした転回は一挙に私の精神のなかに起り、私はその秋いっぱいパリに帰ってからも、ほとんど病人のようになって暮した。

（『異国から』晶文社、1968. 8, p. 282）

引用文中にある1958年は1959年の誤りである。これまで拙論で見てきた辻邦生のパリ滞在中の思索が、このバルテノン神殿との出会いでより確実なものとなったのだ。バルテノン神殿が精神的領域の具体物として出現したのである。

次に『文学のなかの現実』（『読売新聞』1969. 10. 8）ではどのようにしているか。人間の精神の豊かさは富裕な生活を後ろ盾としているのではないかと、これまで考えたことに触れた後での

* 教授

記述である。

たしかに私自身、ある一時期、これに似た絶望感を味わったことがある。日本の貧しさがそのまま精神の貧しさに直結しているような思い——それは私を何度か焦燥と不安にかりたてたのも事実だった。

それが最初にとりのぞかれたのは、十年前、はじめてギリシアでパルテノンの神殿を見たときである。もっと正確にいうと、パルテノン神殿の典雅な美しさと、ギリシアの岩だけの不毛な大地との対比に、息をのんだ瞬間である。

それまでの私は、現実の貧しさが精神の貧しさに直結していると、ほとんど無意識に考えていた。それは逆にいえば、豊かな精神、豊かな芸術は、豊かな生活の結果にうまると信じることにほかならなかった。なるほど古代ギリシア文化が地中海交易と植民地支配による富の一結果であることは事実であろう。にもかかわらずこの精神の豊かさに匹敵しうる生活の豊かさなど、ほとんど存在するとは思えなかった。そこには、なにかに言いしれぬ隔絶があった。ギリシアの不毛の自然が象徴するとき貧しい現実と、神殿が象徴するとき豊かな精神との、きわめて明白な対立があった。つまり人間の精神は、貧しい現実をこえて、かくも豊かな内容をつくりあげたという、啓示的な事実が、そこに示されていた。

ここには「現実即真実」というよりは、「精神即真実」というべき態度が積極的に示されていた。現実はその限りでは何ものでもなく、あくまでそこから精神の力で新たな可能性をくみあげ、それによって豊かな世界をつくりだしている——この事実は、当時の私にとって、何より強いはげましとなった。それは「貧しい現実」という前提をつきくずしてくれたし、また精神によって造型する世界、とくに小説世界の根柢を、いっそうたしかなものにしてくれるように思えた。

(『海辺の墓地から』新潮社、1974. 1, p. 106)

この引用文中の初めの方にある「パルテノン神殿の典雅な美しさとギリシアの岩だけの不毛な大地との対比」という部分について言及しておきたい。先にも書いたように論者は辻邦生の足跡をたどりたくて、この地のパルテノン神殿に訪れた。確かに白い岩がむき出しになった丘にそびえ立っている神殿は荘厳以外の何ものでもない。にもかかわらず、こんな岩山の上になぜ好んで荘厳な神殿を造りあげたのだろうか、という思いを持った。

このギリシアの地（実際は対岸のトルコ領のエフェソス）を調べた考古学者の報告にもとづいたテレビ番組を見たことがある。その番組は、かつてのギリシアの地は肥沃であったと、結論づけている。幸いにしてこの番組をまとめた文献がある。そこから関係した部分を引用しておく。出典は『NHK地球大紀行6』の「3自然からの逆襲」の章で、文明の誕生、発展、衰亡の歴史を知るために用いられた花粉分析について触れた後に続く文章である。

植物の多くは、花を咲かせ、花粉を大気中に漂わせる。花粉はやがて、大地に落ちる。そこが湿原であったり湖であると、何万、何十万年と長い間花粉が堆積し、残される。花粉は植物の種類によってそれぞれ違い、また、花粉の外皮はスポロポレニンという物質でできており、いつまでたっても腐らないという性質を持っている。湖底や湿原をボーリングして、過去の花粉を取り出し、調べると、年代ごとにどんな植物が繁茂していたかがわかる。この方法を用いて、広島大学の安田喜憲氏はエフェソスの過去の自然環境を調べた。……略……

調査によると、今から4000年以前のエフェソスの周辺には、高さ15メートルほどのナラやマツなどの林が生い茂っていたことがわかった。それが4000年前ごろを境として、ナラの樹木が減少し、かわって、ムギ、イネ、キク、ヨモギ、オオバコなどの単性の植物が増加している。このことは、エフェソス周辺で、4000年ほど前から森林を切り拓いて、農耕が開始されたことを示している。ヨモギやオオバコは牧草であり、牧畜も盛んに行われていたことを示している。

この樹木と単性植物の増減を見ていくと、2200年前ごろには、単性の植物が樹木に対して優勢であり、多くの森林が切り払われて、耕地化や牧草地化が広がったことを示している。2200年前といえ、ギリシア・ローマ文明が最も隆盛をきわめた時であった。その後、十八世紀ごろから、草性の植物が減り始め樹木が回復してくる。これは耕地が荒廃し、農耕と牧畜が放棄されたことを示すと同時に、やせ地に生えるマツなどが拡大していったことを示している。……略……

古代エフェソスは、地中海の大港町であったが、現代の地図では海岸線から約六キロメートルも内陸部にある。これは、この辺りを流れる小メンデレス川が、周辺の土砂を入り江に流し込み、港を埋めてしまったことを示している。……略……

森林を切り拓き、耕作地と牧草地をつくったために大量の土壌が流されたのだ。その結果食糧生産が不可能となり、同時に港の機能も失って、エフェソスは崩壊したのであった。……略……

ギリシア、イタリア、スペイン、さらに北アフリカ、オリエント西部、トルコなどには、かつては世界で最も繁栄した国々があった。しかし、今では多くの国々は人口も減り、衰退化している。大地がやせ衰え、さらに乾燥化していったために、生産力が減少し、多くの人口を支えることができなくなったのである。同時に文明もまた衰退していった。

(NHK取材班『NHK地球大紀行6』日本放送出版協会、1977.12,p.109~113)

この報告に従えば、二千年以上も前のギリシアの地は今とは比べものにならないほど肥沃な大地であったことが真相となる。論者はこのことを生前の辻邦生に尋ねることを失念してしまった。だからこのことについて聞かなかったことが悔やまれてならない。ここにこのような真相を書くことで辻邦生の言う「啓示」はくつがえされるであろうか。それはないと断言できる。ただし「不毛なる自然と豊かなる精神」という明確なる対比が失せてしまうから、わかりにくくなるだろう。

いずれにせよこのようなことが事実だとして、ギリシアの地が肥沃だったと認めるにしても、ここに引用した『文学のなかの現実』における思索が否定されるものではない。当時の大地が肥沃であろうと不毛な地であろうと、このパルテノン神殿を築きあげた古代ギリシア人たちの精神は現代に伝わるのだ。事実、辻邦生は「貧しい現実」を前提としなくてよい、という結論に到達しているのだから。この『文学のなかの現実』では、先に引用した『主題からの探索』よりもっと明確に「小説世界の根拠を、いっそうたしかなものにしてくれるように思えた」と書いている。

次にギリシア体験が書かれたエッセーは、「立教」(立教大学、1971.3)に掲載された『想像力と現実』である。人間の悪魔性によって引き起こされた戦争、特にユダヤ人虐殺に触れて文学の可能性を見失った状態にあって絶望的であったと、その当時の思いを語った後に触れている。

ところがこのような状況の中で、かすかな可能性、

ないしはある考えの手掛りを掴むようなことが起きました。それはフランスへまいりましてヨーロッパの精神が結晶させたさまざまな風土に接し、とくに一九五九年夏にギリシアを訪れそこであのパルテノンの神殿を目のあたりにしたことです。その時神殿はぎらぎらと照りつける夏の太陽の中でアテネの街の荒廃とギリシアの不毛の風土に対抗し、むしろそれをのり超えるようなかたちで聳えていました。それはひじょうな美しさであり、精神の高貴さというものさえ感じられて、こんなものを人間が造り得たということはたいへん驚きでした。そしてその時、物質の現実に代表される「現実の苛酷性」を超える精神の苛酷さ・精神の現実性というものが存在したのではないかと、そしてこれまでは「事実の過酷性」があまりに強烈であったためそのことが忘れられてしまっていたのではないかと、こんな確信がほとんど直感的に光のように私の心を貫いたのです。

この神殿の美しさに触れて、この美しさはギリシアの不毛、ギリシア人を支配した野蛮な状態から、そういうものを克服した後でできたもの、むしろそれとの緊張関係においてできあがったものであって、これは完全に一種の力、精神の力であると思ったのです。つまりある物質的なものが繁栄し人間性が陶冶され豊かになって、その結果として木から木の実が落ちるようにそういう美しいものが生れてきたのではなく、実は悪魔性をふまえて、むしろ悪魔性があるからこそそれを自覚しそれとの緊張関係において美しいもの、人間性を陶冶するものを造りあげたのではないかと——そんな認識が私の中にかすかに生れてきたのです。つまり囲りの絶望的状况、人間の悪魔性といった直接的な現実を超えて存在するものが信じられる場合——かかる「精神の領域」にわれわれ人間存在の根底があると考えられる場合——そしてそれを百年、千年といった長い単位において考えることができる、といった場合に、はじめて一種の平静さ、あるいは熱烈な確信を掴むことができるのではないかと。人間が単に物質に依存しているのではなく、物質を人間自身が支配しているのであって、「現実の苛酷性」に対決する精神の苛酷なる力が存在しているのではないかと、とそう考えたのです。

(『北の森から』新潮社、1974.2,p.114)

ここではギリシア体験で得たものをさらに詳しく説明している。人間の持つ悪魔性を認めながら、そしてその悪魔性が引き起こす現実、「過酷な現実」を見据える。そしてこの「現実」に絶望

することなく、人間にのみ保有され「美」として表現すべき「精神の領域」を人間存在の根底とする。ここに全幅の信頼を寄せて、現実がどんなに過酷であろうと、「美」をこの「精神の領域」の現れ、もしくは象徴とする。辻邦生はこれを直感的に把握したのだ。

次にギリシア体験に触れたのは、1971年4月13日付けの東京新聞に掲載した『小説と時間意識』と題をつけたエッセーである。辻邦生自身が誕生から死までの限られた生、つまり箱の中に閉じ込められたかのような思いを持っていたことを告白した。それがために生じる「アンゴワッス(苦悩)」は、四季に応じて働く農民的な時間意識を持ってない状態、つまり近代社会の勤め人的な時間意識から生まれた、と書き、現代人は無時間化した時間のなかに住み、徒労感を覚えている状態にあると規定した。だから辻邦生は「生」を逆に濃厚に意識することで現代の不毛を乗り越えるのが一つの方法だと言う。その後ギリシア体験を語っている。

私の場合、こうしたアンゴワッスの経験は、同時にギリシアでの一種の美的な啓示として与えられた。ギリシアで私は、美的な存在が、現実の雑多な、実用的な動きの根底にあって、人間が「人間」となる方向を定めている、という確信を得たのであった。もちろんそれはきわめて象徴的な暗示であり、出発点の確認ではあっても、明確な方向を示すものではなかった。

(『北の森から』新潮社、1974. 2, p. 107)

現実的な時間に囚われ、限られた生のなかで、豊かに生き、十分に生きることがどんなことであるかを見出し得ない状態のときにパルテノン神殿に出会ったのである。つまりここでは「美」の永遠性を直感的に知り得たこと、しかも単なる「美」ではなくて、人間の様々な生活の根底にあって、人間を人間たらしめるものが「美」であることの例として挙げたのである。

1972年当時、「新潮」に連載中の『春の戴冠』の主人公ポティチェルリに対する関心の一端を書き記すエッセーが、サンケイ新聞(1972. 3. 3)に書かれた。『ポティチェルリの世界』と題名をつけられた一文である。このエッセーの初めの三分の一ほどのあたりでギリシア体験に触れている。

ルーヴル美術館を何回も訪れたことを書いた後である。

パリに住んでいた当時、私よりも多く訪れたのはギリシア彫刻とこのポティチェルリの壁画の部屋だったように思う。その頃、ギリシア旅行ではじめてパルテノン神殿の美しさに接したが、美が日常世界から永遠の甘美さに人を運ぶものであることを、私はその瞬間、深い歓喜の思いのなかで理解した。かつて私はそれを現世からの逃避と感じたが、ギリシア神殿を見て以来、その考えは根本から覆された。美こそが、日常の歪曲した生から人間本来の生へと高めてくれるものであり、現実生活もかかる美に包まれてはじめて人間的な秩序を取り戻すものだ、と思われたのだった。美は私にとって現実の根底となったと言ってよかった。

(『北の森から』新潮社、1974. 2, p. 235)

同じ事の繰り返しであるにしても、辻邦生はより明確に「美」によって「人間的な秩序を取り戻すもの」と書いたことに注目しておきたい。

そして最も詳しいのが1978年8月に発行された「ユリイカ」の臨時増刊号でギリシア特集の一端として企画された粟津則雄との対談である。そのタイトルは「ギリシア その神話と風景」となっており、冒頭に近い部分でパルテノン神殿の体験を語っている。

ぼくはその後いろんな機会に書いてるんだけど、はじめてギリシアにいったパルテノンを見てその美しさに魂が動揺するような気持を味わった。地上をこえた永遠の美の存在が、そこに具現されている——それをぼくは自らの感覚で確かめた。それまでは、美ということはことばではいわず、美の實在とか美の永遠性とかいはいるけれども、それほど強烈な形でぼくの感覚を貫いたことはなかったわけだね。美しいものを見たことはある。しかしパルテノンの美はそういうものとは違って。そのとき見たのは美の永遠というか實在というか、万象の変転をこえて存在している何か本質存在といったものだった。そういうものが現実にそこにあるということ、そしてそれを人間がいままで支えていたのだ、ということが、それまで感じていた迷いを一挙に吹き払うようにしてぼくの中で深く納得されたのだ。

(『ギリシア その神話と風景』ユリイカ臨時増刊総特

集ギリシア神話、青土社、1978. 8, p. 106)

美の永遠性と実在をパルテノン神殿に見て、美の本質存在と見なしているわけだ。二千年以上の時を経てもおその美しさを異邦人たちに、何人であれ、人間そのものに伝える。現実世界に翻弄され、精神の脆弱さを嘆きつつ、なおも精神世界の具現の手段である小説のよってたつ基盤を求めていた辻邦生に、このような形で啓示は訪れたのである。さらに詳しく語った部分がある。粟津則雄がパルテノン神殿に触れた後である。かなり詳細に語っているのでその部分の全文を引用する。

粟津 それほどあれ（パルテノン神殿）は、純化された、必要なものだけでできた建築なんだな。特に克己的というんじゃないんだよ、べつに克己してるんじゃないんだけど、あるものだけが、いっさい余分なものなしに存在してるのさ。ああいう建築ってのは、その後ぼくはずいぶんいろんなものを見たけれども、ちょっとほかにはないね。

辻 ふつうそういう場合には、削ぎ落した感じのほうが強くて、いま克己といたけれども、どこか、無理した、非常にアセティックな感じがするわけだ。しかしパルテノンの場合にはまさにエロチックという言葉があてはまるようなみずみずしい官能性、非常にさわやかな精神的な、しかも感覚性に満ち溢れているね。あれはじつに不思議だと思ったね。

ぼくは、ギリシアに出かける前、本や絵などから自分のなかでさまざまにギリシアのイメージを描いていたわけだけれども、しかしなおかつ、ギリシアに着くまでは、あのギリシアというものはぼくにはわからなかったと思うんだ。最初の旅ではぼくはイタリア半島の南端のプリンディシから船に乗って、対岸のコルフに着いて、コルフ島から順ぐりに岸づたいにこう行ったわけだ。ギリシアの大地を初めて船から見ているんだけど、いつまでたっても、青い海の向うに、ほとんど禿山の、樹のない、岩肌だけの山がつついている。そして、ペロポネソス半島を一巡りしないでコリントス海峡を通過してピレウス港まで行ったんだ。ギリシアの大地の不毛な感じも意外だったが、船に乗っているギリシアの出稼ぎ人たちの貧しさも、漠然と古代の典雅な文明を想像していたぼくには異様な感じがした。コリントス海峡を通過しているときそばにいた婆さんが娘に、くあたしの若いころは、ペロポネソス半島を一巡りして、あと二日船の中に寝なきゃならなかつ

た)、なんて話していて、それが妙な現実感を持っていた。もちろんピレウス港に着いても、現代ギリシアの喧騒と貧しさだけが目についただけだった。そこからホテル専用バスみたいなのに乗って、その窓からぼんやりアテネの町が近づいてくるのを見ている。すると、町の家並の向うに、丘が見えてきて、丘の上に、小さく褐色がかかった灰色の神殿が見えてきた。その印象はいろいろな形で書こうと思ったけれど、結局非常に単純にしか書けなかった。ともかく空は蒼く晴れたギリシアの夏の真っ昼間なんだ。すべてが光にかすんでいる。そのなかに一点だけ、なにか仄暗い雰囲気があって、その仄暗さのなかにパルテノンが丘の上に小さく見える、これがだんだん近づいてくるんだ、その瞬間——いろいろなときにぼくは自分の運命が変わって感じることもあるんだけど——そのときも、パルテノンからぼくの胸をめがけてまっすぐに走ってきた光りのようなものが、これはおれの運命を変えているな、という実感を伴いつつ、ぼくの身体を強烈な歓喜の思いで貫いていったんだ。

粟津 なるほどね。

辻 それはいまいった美の実在と現象との関係が逆転した瞬間だったんだね。そのときにぼくは何かがこう、本当にわかったという感じをうけた。いわば現象の奥底にほんとうに自分が深くすわりこんだような感じを受けたんだね。その一瞬に、パルテノンがぼく自身と入れかわったようなそういう感じになった。そのあと、ぼくは半ば夢遊状態に似たものにとりつかれていて、じっさいアテネの街がどういうようになっていたんだか、てんで見当もつかない。アカデミア街だったか街の奥にあるユースホテルに泊っていたが、どこに泊っているという感じもなかった。アテネもまだ、58年だから観光化される前で、挨拶いらい汚い都会で、いまよりもっと戦後の陰惨なおいが残っていたんだね。そんなわけで観光ガイドにもギード・ブルーにも全く縁のない旅行していたわけだ。パルテノンに近づくにしても粟津がいまいったように、家の間から神殿が現われては消え現われては消えそして、いつの間にか見失い、再び現われ、そういうふうにして次第に近づいていった。しかしそうやって糸杉と竜舌蘭の間に仰いだ非常に官能的な、しかも高貴な美の原型がアクロポリスの草木一つない岩山の上に立っているってことにまた非常に衝撃を受けた。みずみずしさをみずみずしいというような形で感じさせないような、均斉のとれた、あらゆる贅肉を削ぎ落した美しさが、およそ美とわれわれが呼んでいるものと結びつかない不毛の岩山、不毛な大地と結びついている。この

不思議さに異様な衝撃を受けた。不毛な大地という感じに絶えず違和感を覚えつづけてきたんだけど、そのときになってそれが表面に噴出したわけだね。そのときに二つのことがあった。一つはそういう形で美の存在感が深く理解されたということ、もう一つはぼくらは、とくに日本人は文明とか文化とかいうと、自然に恵まれた豊かさのなかで、余剰価値のようにして生みだされた精神のいとなみというふうになんとか思っているが、じっさいはそうではなくて、不毛にもかかわらず人間は自然的条件を越えて文化をつくるのだ。つまり、いままで余剰価値としての文化というふうに漠然と考えていたものがバッサリ削ぎ落されて、まさに不毛そのもののなかにいるからこそ、精神的ないとなみが可能なんだとそのとき思い知らされたのだ。だから、ぼくはそこで二重の意味で、創造のポジビリティを掴んだわけだね。そういうギリシアの数分間——アテネの街に近づいてパルテノンが見えはじめて、それからバスが通り過ぎて見えなくなるまでのあの数分間に、ぼくの生涯のドラマが決定したという感じがするね。そのあとパルテノンにのぼり、あの白いプロピレイア——あの入り口の建物を透かしてみると、蒼空がほとんど黒く見えるような……。

粟津 そうだね。

辻 そういような白さのあいだを通して、いま粟津のいったとおりの神殿を見たわけだ。しかしそのときは、ぼくのドラマの本質的な部分は完全に完了していたと思う。それはむしろドラマのすべての細部を飾ってくれるような、あるいは鎮めてくれるような、そういう形で心のなかに流れこんで来たんだ。

粟津 辻は非常にいいときにギリシアに出会ってると思うね。ぼくはずいぶんあとだからね。やっぱり人間の出会いってのは不思議なものでね。たとえばギリシアを見た場合もそうだし、ほかのものを見た場合もそうだけれどもね。ぼくはいろんなものをだいぶおくらせて見たでしょう。だから、そのときはすでに、ぼくの眼はできてるわけだよ。びっくりしながらもこれを十年前に見たら、おれはどうなっちゃったろうという、そういう不安と口惜しさを感じたな。

(同、p.107)

ここでもギリシア体験を58年と記憶違いしている。先に引用された文章よりはもっとはっきりと辻邦生の受けた印象が理解できよう。この対談で表現した「余剰価値としての文化」とは、先に引用した『文学のなかの現実』で書いた「豊かな精神、豊かな芸術は豊かな生活の結果にうまれる」

という表現に符合する。この考え方が否定されたことは念を押すまでのことはない。むしろ二千年以上もの時を経ることによって、大地が不毛と化し、パルテノン神殿が美の本質的存在と化したのである。

大地が肥沃であることは、先にも言ったように、問題ではない。この時、この地で辻邦生が受け取るべきは、人間の意志あるいは人間の精神が美を造り出し、パルテノン神殿をその象徴として永遠性を示した、という点だ。辻邦生が戦争によってもたらされた荒廃した現実と人間の精神を目の当たりにして陥った状況から逃れるためには、まさにこのような受け止め方が必然的であり、その象徴としてパルテノン神殿との出会いが必要だったのだ。そしてそれまでパリにあっての思索も、むろんのこと必要であったのだ。

ところでこれらのような文章でなく、悔恨的な文章に登場したギリシア体験に触れておこう。それは『ギリシアの風 ギリシアの雪』(『世界』1979.9)の題で書かれ、「映画〈旅芸人の記録〉の余白に」という副題が付されている。貧しさにまで思いが至らなかったことを書いた後に続く文章である。

私の胸に悔恨の痛みが走るのはここからである。当時、何かを求めさがし、やがてアテネのアクロポリスの丘に仄暗いまでに高貴なパルテノン神殿を見出すように運命づけられていた私の眼は、このとき、甲板の上のギリシアの民衆にそそがれず、驚きと不調和の思いのなかで、遙か遠く、どこか岬の上に、間もなく現われてくるであろう白い神々の廃墟を求めて、さまよっていたのであった。

たしかに当時の私の精神状態のなかでこれ以上のことを要求するのは無理だった。そのことは私がいちばんよく知っている。あの時点では、私の眼が民衆を越えていってしまったとしても、それはそれで仕方がなかった。というのは、自分にとって問題化されていない現実の部分の切り捨てることによって、自らの問題状況の一つの纏まりを掴み、その上でその解決を見出してゆくプロセスは、方法的に言っても正しいし、私の場合も正しかったからである。私はそのおかげで、パルテノンの美のなかに〈永遠〉という観念の具体化を感じることができた。そしてそれを手がかりに私は小説を書くという行為の端緒を掴むことができた

のであった。

しかし悔恨がそれでも私の胸を痛ましめるのは、パルテノンの美はともかくとして、青い青いイオニア海の岸辺に白い神殿をひたすら待ちつづけた私の眼が、年老いたオリーブの林のあいだに、打ちひしがれたようなコルフ島の貧しい家並を見ていたにもかかわらず、それを現実のギリシアと意識できなかったからである。

(『遙かなる旅への追想』新潮社、1992. 4, p. 26)

このエッセーを書いた時点では、当時を単に回顧するのではなく、はるかに広い視野を得てからであって、かくも厳しく当時の自らを見ている。ならばなぜそのような視野をもって回顧しているのか。ここでは問題提起にとどめておく。

最後に「本の窓」(1985. 7)に掲載された『ルーヴルと最初に会った頃』の一部分を引用しておこう。辻邦生の師である森有正にせかされて訪れたルーヴル美術館のギリシア彫刻の部屋で心の落ち着きを得た後の記述である。

最初のパリ滞在は私の彷徨時代に当たっていたので、いつも心が晴れていたわけではなかったが、ルーヴルの、とくにギリシア彫刻の前に立つと、迷いのようなものが一挙に消えるのを感じた。その翌年の夏、ギリシアに旅立ったのは、こうしたルーヴルでの日々の、ほとんど論理的必然だったとっていい。

すでに何度も書いたことだが、アテネでパルテノン神殿を見た瞬間、啓示の光が私を貫き、私の魂は新しい金属で铸直されたような気がした。そのとき、私は〈美〉が人間の運命を高めるものであることを確信したが(小説が書けるようになったのもそれ以後のことである)、このギリシアでの魂のドラマを秘かに準備してくれたのがルーヴルのギリシア彫刻展示室だった。

(『美神との饗宴の森で』新潮社、1993. 10, p. 230)

パルテノン神殿を見た当時の日記から、辻邦生が受け、書き留めた印象を見よう。

(以下次号)

(1999. 10. 4 受理)